

南フロリダ大学研修体験記

岐阜大学医学部附属病院 消化器外科 深田真宏

2024年1月27日から1月31日にかけて、南フロリダ大学の表敬訪問と医学教育に特化した大規模シュミレーションセンターである CAMLS (Center for Advanced Medical Learning and Simulation) との MOU 締結などを目的とした海外派遣に吉田和弘学長補佐として、今回同僚の藤林勢世先生と共に同行させていただきました。結果、5日間のスケジュールは驚くほど tight で濃密な研修となりました。

1月29日に今回の訪問の主な目的の一つである CAMLS へ施設訪問させていただきました。CAMLS は全米でも最大規模のシュミレーションセンターであり、外来診療から各種検査（経食道心エコー、腹部エコー、上下部消化管内視鏡検査など）、そして手術（腹腔鏡およびロボット支援下）に関する数多くの精巧なシュミレーターが整っていました。南フロリダ大学自体は日本の国立大学とは異なり附属病院を有していないことあり、医学教育を実臨床の場で提供する代わりとして CAMLS がその役割を担っていると思うのですがクオリティが極めて高く、むしろ制約の多い現場での研修より反復して効率的かつ実践的な教育が可能ではないかと感じました。また岐阜大学附属病院でも定期的に模擬患者を用いた大規模災害を想定した訓練が実施されていますが、CAMLS ではより高頻度に同様の訓練が実施されていました。加えて、メイクだけではなく本物の役者に模擬患者を演じてもらうなどリアリティーをより重視していることにも驚かされました。過去の訓練の様子をみせていただきましたがまるで医療映画のワンシーンのようでした。CAMLS の所長である奥田先生は穏やかで優しく、MOU 締結後にどのように岐阜大学との連携をしていくかについても非常に前向きな提案をしていただきました。その後も岐阜に訪問されており、今後の地域医療・医師育成にとって重要な機会になったと感じています。

続いてタンパ総合病院を見学する機会をいただきました。タンパ総合病院は病床数 1600 床の大病院であり、うち ICU は 300 床あるとのことでした。海外では日本と異なり病院の担う役割が特化されていることもあり、効率的な病床運営のために中央で患者および病床稼働状況が詳細に管理されていました。さらに手術室は 60 室あり、一日におよそ 3 件の手術がそれぞれで実施されており、消化器外科については疾患問わずほぼすべてがロボット支援下で実施されていました。そこで日本から移植外科を目指して留学されている女性医師の茂呂先生（卒後 10 年目）とお話する機会をいただきました。移植を勉強するにはやはり海外が圧倒的にいい環境だけれど、やはり競争が激しいので臨床のみではなく臨床研究の業績もスピード感をもってとりくまないとあっという間にチャンスを失ってしまうこともあると教えていただきました。実際同僚の何人かは途中で離脱したり、体調を崩してしまっ

たけれども、やっぱりこの環境で成長を実感しながら過ごす日々がかけがえのないものと本心からお話してくださいました。自分より若い先生が単身海外で奮闘している姿を見て、自分の身も引き締まる思いでありやはり臨床と研究、そして教育とバランスよく危機感をもって取り組むことの重要性に改めて気づかされました。ただ最後に茂呂先生はやはり日本の手術レベルが極めて高いことを海外に来てはっきり実感したと教えてくださったことは、われわれ外科医にとって大変嬉しいことでした。

1月30日には南フロリダ大学を表敬訪問し、Rhea Law 学長とお会いする機会をいただきました。両学長のプレゼンテーションを拝聴しましたが、南フロリダ大学は全米を代表する大学のひとつでもあるため圧巻のスケールで驚かされるばかりでした。一方で、吉田学長のプレゼンテーションもユーモアも交えて非常に丁寧でわかりやすく、われわれにとっても知らなかった岐阜大学の魅力を知ることができた素晴らしいものでした。

また同日 Moffitt Cancer Center and Research Institute を見学させていただきました。施設の規模もさることながら、臨床と研究の距離が近く連携もスムーズであり腫瘍外科医にとっては理想的な環境であると感じました。岐阜大学も附属病院と研究棟が隣接していることから、モデルケースとして参考になることは多いと思いました。

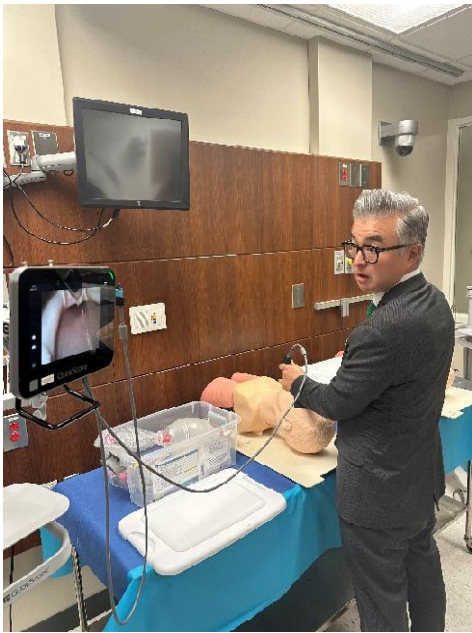
滞在中、他にも多くの関連施設の見学とその施設代表者の方たちと交流をさせていただくことができました。どの施設も南フロリダ大学の理念が強く反映されていましたし、関わっている人たちにも大学への愛情を感じることができました。規模に関わらず大学への思いが結局のところ大学の運営と発展には一番大切なのもかもしれないと、今回の海外研修を通じて思いました。自分自身にとって岐阜は生まれ育った場所ですし、岐阜大学は職場でも母校でもあり思い入れのある存在です。岐阜大学への思いをもって日々の業務に取り組むことができれば自分にとっても大学にとっても実りあるものになると信じて、今後頑張ろうと思います。

最後に今回の研修期間、特に Lynette Menezes さん、Jesse Casanova さん、そして Prof Sakai 先生には非常に手厚いご対応をいただき大変なスケジュールではありましたが快適に過ごすことができました。その hospitality 精神には感服するばかりでしたし、心から私たちの来訪を喜んでいただいていることが伝わりました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。また、吉田和弘学長にも多くのお気遣いをいただきました。3日目に藤林先生が体調不良になった際にはすぐホテルに戻るようにご指示いただき、その上差し入までいただきました。おかげで4日目以降は体調も回復し、全員で研修ができたことは本当に良かったと思います。本来学長をサポートする目的で同行したのにも関わらず、結果的にご負担をおかけすることになった点は大いに反省しております。今後も南フロリダ大学との良好な関係が続いていくことを心より祈念して報告を終わらせていただきます。

【写真】



↑ St Petersburg にて。



↑ CAMLS にて。奥田所長による挿管シュミレーターの実演。



↑ Rhea law 学長と。



↑ Moffitt Cancer Center and Research Institute にて。